

## 錢謙益の歸有光評價をめぐる諸問題

野村 鮎子

### はじめに

歸有光<sup>①</sup>(字は熙甫、號は震川、正徳元年―隆慶五年 一五〇六―一七二)は、今日明代第一級の唐宋派古文作家として知られている。しかし、このような高い評價は初めから存したわけではない。

歸有光の主な文學活動の時期は、李攀龍(一五一四―一七〇)・王世貞(一五二六―一九〇)ら古文辭派後七子の全盛期と重なっており、歸有光は中央文壇から隔たった吳の一老學子に過ぎなかった。六十歳で進士に及第するまで、彼が會試で八度の下第を繰り返したことはよく知られている。この時期の歸有光は自らの意思に反して、古文作家としてよりはむしろ八股文の名手として名を得ていた。彼の死後、古文辭から脱却しつつあった王世貞は「歸太僕贊」(『弇州山人續稿』卷一五〇)を作り、歸有光の古文を韓愈・歐陽脩を繼ぐものとして評價したが、後に反古文辭の主張を掲げて登場した公安派や竟陵派からはあまり顧みられていない。死後の歸有光は、文學史の中で半ば埋没しかかった存在だったといえよう。

このような歸有光を發掘し、再評價したのは、明末に於ける反古文辭の領袖、錢謙益である。錢謙益が歸有光を評價したいきさつは、す

錢謙益の歸有光評價をめぐる諸問題

でに吉川幸次郎氏や佐藤一郎氏によって論じられている。錢謙益は、歸有光の孫である歸昌世とともに『歸太僕文集』(佚)を編纂する一方、『列朝詩集』で古文辭派を斥け、歸有光文學の正統性を主張した。今日の歸有光に對する高い評價は、錢謙益の功に負うところが大きい。しかし、錢謙益の歸有光像というのは、それをそのまま鵜呑みにするにはあまりにも大きな問題を孕んでいる。すなわち、錢謙益は歸有光を自らの反古文辭の先覺者としてとらえるあまり、歸有光を反古文辭という枠組みでもって典型化しすぎた嫌いがあるのである。

『列朝詩集』歸有光小傳に描き出された歸有光の、古文辭派と眞つ向から對立した人物というイメージは、『列朝詩集』自體の評價の問題と関わりなく、長い問我々の中にあり續けた。そして従來の歸有光研究も、こういった錢謙益が作りあげた歸有光像の範疇を出ることはなかったように思われる。

本稿は、『列朝詩集』小傳の歸有光像を再検討し、歸有光墓誌銘の改竄へとつながる錢謙益を中心とした歸有光評價の問題点を考えるものである。

一 『列朝詩集』 歸有光小傳と『明史稿』『明史』への影響

錢謙益の『列朝詩集』 歸有光小傳は、歸有光の文學を次のように評價する。

有光、字は熙甫、崑山の人なり。九歳にして能く文を屬り、弱冠にして盡く六經三史六大家の書に通じ、浸漬演進し、蔚として大儒と爲る。……熙甫の文を爲るは、六經に原本して、而も太史公の書を好み、能く其の風神脈理を得たり。其の六大家に於いては、自ら謂ふ、歐(陽脩)・曾(鞏)に肩隨す可く、臨川(王安石)は則ち抗行するに難からずと。其の詩に於いては、工を求むるに意無く、滔滔として自運するに似、要は流俗の及ぶ可きに非らざるなり。

右のようにいう錢謙益は、『列朝詩集』に二十一首の歸有光の詩を採る。見たところその數は少ないようにも思われるが、例えば古文辭派後七子の領袖李攀龍の總數千四百餘首に及ぶ詩のうち二十八首(そのうち三首は劣詩と評される)しか採らないのに比べて、詩に長じていなかった歸有光の詩を總數一二九首中、二十一首も採るのは、破格の扱いといえよう。

さらに小傳は、歸有光文學の反古文辭的性情を表すものとして、王世貞(字は元美、號は弇州)との次のようなやりとりを載せている。

是の時に當り、王弇州は二李(李夢陽・李攀龍)の後を踵ぎて、文壇に主盟し、聲華烜赫として、四海に奔走す。熙甫は一老學子にして、獨り遺經を荒江虛市の間に抱き、牙頰を樹てて相ひ措挂し少しも下らず。嘗て人の文の爲に序して、俗學を詆排し、以爲ら

く、苟も一二の妄庸の人を得て之が巨子と爲すと。弇州之を聞きて曰はく、「妄は誠に之有るも、庸は則ち未だ敢て命を聞かず」と。熙甫曰はく、「唯だ妄なる故に庸なるのみ。未だ妄にして庸ならざる者有らざるなり」と。弇州晩歲、熙甫の畫像に贊して曰はく、「千載 公有り、韓・歐陽に繼ぐ。余豈に異趣せんや、久しくして自ら傷む」と。識者謂へらく、先生の文、是に至りて論定まれり、而して弇州の遲暮の自悔及ぶ可からずと爲すと。

錢謙益がいうところの歸有光の序文とは、次に擧げる「項思堯文集序」(四部叢刊本『震川先生集』卷二)を指している。

蓋し今の世の所謂文なる者は言ひ難し。未だ始めより古人の學を爲めずして、苟も一二の妄庸の人を得て之が巨子と爲し、争ひて之に附和し、以て前人を詆排す。韓文公云ふ、「李杜文章在り、光燄萬丈長し。知らず群兒の愚かなる、那を用つてか故に誇傷する。虺虺大樹を撼がす、笑ふ可し自ら量らざるを」と。文章は宋元の諸名家に至りて、其の力以て數千載の上を追ひ、而して之と頡頏するに足れり。而るに世の直だ虺虺を以て之を撼がすは、悲しむ可きなり。乃ち一二の妄庸の人之が巨子と爲りて以て之を倡道する無からんや。

この文は、歸有光の文學思想を知るうえでとりわけ重要なものとされている。歸有光は韓愈の「張籍を調る」詩を引いて、當世の輕薄の徒が宋元の文を輕んずるのは、虺虺——大鐵が大樹を撼がすようなものだとして批判する。宋元の文を評價しようとする歸有光のこの主張は、「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」という極端な古典主義の文學理念がまかり通っていた時代にあつては、極めて特異なものであつた。さらに歸有光は、虺虺が大樹を撼がすような状況は、妄庸の巨子が唱道し

ているのだという。

この〈妄庸の巨子〉については、前掲の『列朝詩集』小傳によれば、  
「妄庸の巨子」とは自分を譏った言葉だと思つた王世貞が、「妄ではあつても、庸とは身に覚えがない」と反論し、さらにそれに對して歸有光が、「妄だからこそ庸なのである。妄でありながら庸でない人はいない。」とやり返したことになる。この『列朝詩集』小傳が傳えるエピソードは大變有名なものであり、歸有光文學を論じる際には、「項思堯文集序」とともに必ずといっていいほど引用される資料である。

また、『列朝詩集』小傳の記述は、王鴻緒の『明史稿』や『明史』の歸有光傳に大きな影響を與えている。『明史稿』および『明史』は次のように語る。

有光の古文を爲るは、經術に原本し、太史公の書を好み、其の神理を得たり。時に王世貞文壇に主盟す。有光力めて相ひ舐排し、目して妄庸の巨子と爲す。世貞大いに憾むも、其の後亦た有光に心折し、之が爲に讀して曰はく、「千載公有り、韓・歐陽に繼ぐ。余豈に異趨せんや、久しくして自ら傷む」と。其の推重すること此の如し。

『明史稿』および『明史』は、歸有光と王世貞の論争の話こそ載せていないが、歸有光が王世貞を〈妄庸の巨子〉と目したこと、王世貞はそれを非常に憾んだものの、晩年には「歸太僕贊」を作つて歸有光に心服したことをいう。

右の部分、『明史稿』『明史』とも異同は無い。ただし、『明史』では刪去されているものの、『明史稿』はこれに續いて次のような意見を載せる。

#### 錢謙益の歸有光評價をめぐる諸問題

錢謙益遂に其の言に即きて、以て世貞を詆る。然れども操觚の家、此れ從り實學鮮くして、妄りに歐・曾を談ずるは、亦た弊無きこと能はずと云ふ。

『明史稿』は、錢謙益が王世貞の自悔の言を逆手にとつて王世貞を詆つたことに對して批判的である。また、そのことが契機となつて實學に乏しく妄りに歐・曾に追隨するような文學狀況が出現したのだという。これは、『明史稿』の撰者が錢謙益の文學觀に懷疑的であり、その歸有光評價の仕方についてもやや行き過ぎを感じていたことを示している。

しかしながら、實は『明史稿』や『明史』の歸有光傳自體は、皮肉にも『列朝詩集』小傳に據つていたのである。傳記全體の記述には措辭の酷似が認められるし、就中、歸有光と王世貞の相剋については、『列朝詩集』小傳を資料として用いた節がある。例えば、王世貞「歸太僕贊」の末句は、原文（弇州山人續稿）では、「久しくして始めて傷む」となつてゐる。『明史稿』や『明史』が「久しくして自ら傷む」に作るのには、明らかに『列朝詩集』小傳に據つたがために生じた誤りである。つまり、『明史稿』や『明史』の歸有光傳は、先行の『列朝詩集』歸有光小傳を踏襲したにすぎないのである。

このように『明史稿』や『明史』が『列朝詩集』小傳の記載を基にしてゐるとすれば、今日明代文學史の上では定説のようになってゐるところの、歸有光が當時の古文辭の領袖王世貞を〈妄庸の巨子〉と批判して王と論争したという話や、敢然として古文辭派に立ちむかつたという歸有光像は、畢竟錢謙益の歸有光評價に端を發することにな

一方、清初、歸有光の文を酷愛した汪琬は、「擬明史列傳」の歸有

光傳（『鈍翁續稿』卷五十一）に次のようにいう。

有光の學は、六經に原本す。而して司馬遷の書を好み、其の風神脈理を得たり。故に文を爲りて超然俊逸、古への大家に配す可しと云ふ。是の時、太倉の王世貞、方に辭章を以て名ありて、海内を傾動す。有光獨り歎じて曰はく、「今の文は言ひ難し。未だ嘗て古人の學を知らずして、苟も二の妄庸の人を得て之が巨子と爲し、争ひて之に附和し、用て以て前賢を詆誹す」と。意ふに蓋し世貞を指すなり。其の後世貞之を聞き、亦た婉服す。

錢謙益嫌いで有名な汪琬であるが、〈妄庸の巨子〉とは王世貞のことであるという判断は、錢謙益と軌を一にしている。もっとも汪琬は、歸有光と王世貞の〈妄庸〉をめぐる論争については、一言も觸れていない。汪琬は『列朝詩集』小傳を見ていたに違いないとしても、この判断そのものは、歸有光の「項思堯文集序」から汪琬自身が導き出したものである。「意ふに蓋し世貞を指すなり」という言葉は、それが汪琬の推測であることを示している。

さらに、汪琬の歸有光傳によれば、後になって「項思堯文集序」に込められた批判の意を知った王世貞が、婉じて歸有光に心服したのだという。『列朝詩集』小傳の方では、この批判を知った王世貞がそのまま歸有光と論争することになっており、錢謙益の『列朝詩集』歸有光小傳と汪琬の「擬明史列傳」歸有光傳は、兩者に事實關係の齟齬が認められるのである。

ここで注意を要するのは、『列朝詩集』小傳以前の歸有光の傳記資料には、王世貞との〈妄庸〉をめぐる論争の話がみえないことである。墓誌銘・墓表をはじめ、歸有光の文集の現存する一番古い版本崑山本（三十二卷本）に附載されている、歸有光の子供達の手になる「先

君述」や「先君序略」には、この話は全くみえない。このエピソードは歸有光の死から數えて七十年以上経つてから忽然と現われたのである。

錢謙益は、歸有光の死から隔ること十一年、萬曆十年（一五八二）の生まれであり、歸有光の講筵に連なることはかなわなかつた。錢謙益は一體どこからこのエピソードを引き出してきたのであろうか。

## 二 婁堅「歸太僕應試論策集序」

——『列朝詩集』小傳の原資料

それは、錢謙益の歸有光文學との出會いに大きく関わっている。

錢謙益は、若い頃古文辭に傾倒し、王世貞や李攀龍の詩文を読みふけていたが、四十歳ごろになって始めて反古文辭に目覺めたという。「答杜蒼畧論文書」（『有學集』卷三十八）で、彼は次のように告白する。「僕、狂易愚魯にして、少くして學を失す。一は程文帖括の拘牽に困み、一は王李俗學の沿襲に誤られた。年四十に近づきて、始めて二三の遺民老學に従ふを得、先輩の緒論と夫の古人の詩文の指意、學問の原本とを聞くを得て、乃ち始めて豁然として悔悟」したのであると。

錢謙益が古文辭から反古文辭に轉向したきっかけは、二三の遺民老學すなわち〈嘉定の宿儒〉との出會いである。そしてそれは、歸有光という文學者の發見でもあった。彼は「新刻震川先生文集序」（『有學集』卷十六）に次のようにいう。

余、少壯たりしとき俗學に汨没す。中年にして嘉定の二三の宿儒に従ひて遊び、（震川）先生の講論を郵傳され、幡然として轍を易へ、稍々向方を知れり。先生實に其の前路を導くなり。啓・禎の交、海内の先生を望祀すること、五緯の天に在り、芒寒色正な

るが如し。其の端は亦た余自り之を發す。

俗學とは、古文辭に對する批判を込めた言い方であり、錢謙益がそこから方向を轉じたのは、〈嘉定の宿儒〉から歸有光の説を傳へ聞いたことによるという。さらに彼は、天啓の終りから崇禎のはじめにかけて、世に歸有光の價值が認識されるようになったのは、自分が歸有光を發見したためだと公言する。なるほど上述したように、錢謙益が發掘、表彰するまで歸有光は半ば忘れられた文學者であった。

この歸有光發掘のきっかけとなった〈嘉定の宿儒〉とは、歸有光が最初の會試に失敗してから九度目の會試で進士に及第するまで嘉定の安亭江上で學を講じていた、その弟子筋にあたる人々である。錢謙益は「嘉定四君集序」〔初學集〕卷三十二で、唐時升（一五五二—一六三六）、婁堅（一五五四—一六三二）、程嘉燧（一五六五—一六四三）、李流芳（一五七五—一六二九）の四人を歸有光の遺派として推賞している。ただし、歸有光が嘉定で講學していたのは嘉靖四十三年（一五六四）までであるから、父が歸有光の知友であった唐時升を除いては、年齢からみて他の三人が歸有光の直弟子であったとは考えにくい。

このうち婁堅は、晩年の王世貞と親交があった人物であるが、彼に「歸太僕應試論策集序」〔學古緒言〕卷二と題する文があり、これが錢謙益の『列朝詩集』歸有光小傳の原資料となったと考えられる。

崑山の歸熙甫先生、少くして經術に邃く、注疏に於いては、讀まざる所無し。時の文を厭薄し、力めて大雅を追ふ。尤も左氏・太史公の書を好み、平生其の傍に丹鉛し、提要鉤玄は、甯だ數本のみならず。繁簡少しく異なると雖も、先に指歸を求め、次いで菁藻に及ばんことを要す。而して唐宋六氏の作は、則ち皆沈浸して取裁する所なり。……又た言ふ、吾の學子の業を爲すは、筆に信

錢謙益の歸有光評價をめぐる諸問題

せて縱横なるに、世多く以て奇と爲す。古文辭を爲すに至りては、必ず程度に謹み、敢て少しも自ら弛うせず。願だ其の深く我を知る者は、世を擧げて僅かに數公なるのみと。先生嘗て人の爲に其の文に序し、中に妄庸の譏り有り。或るひと曰はく、「妄は誠に之有るも、未だ必ずしも庸ならざるなり」と。先生曰はく、「子未だ之を思はざるのみ。唯だ庸なる故に妄なるのみ。唯だ妄なれば益々庸なるのみ」と。聞く者心に厭かざるは莫し。是の時〔6〕に當りて、吳の高文を以て稱せらるる者、王司寇元美と曰ふあり。其の始め異同無くんばあらず。留都（南京）自り歸るに及び、其の家従り畫像を求め、摹して小幅を爲り、系するに傳贊を以てし、予に屬して之を書せしむ。蓋し曰はく、「千載公有り、韓・歐陽に繼ぐ。予豈に異趨せんや、久しくして始めて傷む」と。而して司寇の季子、時に予の爲に言ふ、公の歸するや、嘗て蘇の應詔の諸篇を讀み、顧みて之に語りて曰はく、「此れ乃ち策と謂ふ可きのみ。吾が晉楚の錄せし文、豈に能く及ばんや」と。予是れを以て歎服す。司寇晩年、識益々高くして心益々下ること、蓋し此の如し。而れども世の君子、或ひは未だ必ずしも之を知らざるなり。

この文と第一章で掲げた『列朝詩集』歸有光小傳とを比べてみると、重要な違いに氣づく。婁堅は、歸有光と〈妄庸〉をめぐる論争した人物については、「或るひと」というだけで、王世貞であるとは言っていない。傍線(a)の、〈妄庸〉をめぐる論争と、これに續く傍線(b)の、王世貞が後に自己の歸有光觀を改めて、彼の畫贊を作ったという話は全く別の事柄である。錢謙益は、歸有光と論争した「或るひと」というのを王世貞に讀みかえて、二つの話を一つの話に仕立て直したので

ある。さらに彼は、論争の言葉を少しく強い調子に書き改めている。これがどのような効果を生み出したかは言うまでもない。後世の人々は歸有光を時の文壇のボス王世貞を向うにまわして一步もひかなかつた勇氣ある人物としてとらえ、ひいては、古文辭派全盛の時代にそれと眞正面から對決した反古文辭の先覺者という歸有光像を抱くに至つたのである。

歸有光が當時の文學に不満を抱いていたことは確かである。彼が「項思堯文集序」に韓愈の詩を引用するのは、それ自體、「古文の法は韓愈に亡べり」という論が行なわれていた時代にあつては、反抗であり、冒險である。しかし、だからといって文學觀の相違イコール人間關係の對立という圖式を描くのは早計である。歸有光周邊の文學環境——地緣、血緣、文緣といったあらゆる面からの考察が無ければ、その時代に於ける歸有光の眞の姿を見失つてしまうことになる。

### 三 歸有光と古文辭派の人々

抑々王世貞を中心とする古文辭派の人々と歸有光はいかなる關係にあつたのだろうか。

まず王世貞であるが、彼は琅琊の王氏を名乗る吳の名族である。王世貞が屬する太倉の王氏を東族といい、崑山に住む王氏を西族という。歸有光の姉は西族の王三接に嫁している。また歸氏には二派あつて、歸有光の屬する崑山のほかに常熟に屬するものがあるが、常熟の歸百泉は、王世貞の母の實家郁氏から妻を迎えている。極めて遠いものであるとはいへ、王世貞と歸有光は姻戚關係にあつたことになる。

さらに歸有光は、嘉靖三十八年（一五五九）に獄死した王忬つまり王世貞の父のために、翌々年「思賢王公誄」（『震川先生集』卷三十）を

作り、王世貞・世懋兄弟を慰めている。そのためであろうか、嘉靖四十四年（一五六五）、歸有光が進士に及第し、太湖のほとりの長興知縣として赴任するにあたり、世貞・世懋兄弟は彼に詩を贈っている。このうち王世貞の詩を擧げておこう。

送歸熙甫之長興令 其一

淚盡陵陽璞始開 淚は陵陽に盡きて 璞始めて開き

一時聲價動燕臺 一時の聲價 燕臺を動もす

何人不羨成風手 何人か 羨まざる 成風の手

此日直看製錦才 此の日 直だ看る 製錦の才

若下雲迎僊鳥去 若下 雲迎へて 僊鳥去り

雪中山擁訟庭來 雪中 山擁して 訟庭來る

莫言射策金門晚 言ふ莫れ 金門に射策すること晚しと

十載平津已上台 十載 平津 已に台に上る

其二

墨綬專城可自舒 墨綬 城を専らにして 自ら舒ぶ可し

應勝待詔在公車 應に待詔して公車に在るに勝るべし

春山正好時推案 春山 正に時に推案するに好ろし

化日何妨且著書 化日 何ぞ且つ書を著すを妨げん

到縣齋宮留孺子 縣に到らば 齋宮 孺子を留め

詰朝車騎請相如 詰朝 車騎 相如を請ふ

客星能動郎官宿 客星 能く郎官の宿を動かし

白雪陽阿興有餘 白雪陽阿 興餘り有らん

原注：子與時在邑，與熙甫善，故云。

王世貞は、一首目で、楚の卞和が玉璞を得ながらその眞價が認められず、三番目の王の時に初めて陵陽侯に封ぜられたという故事を引い

て、長い間の不遇を経てやっと進士となり就職した歸有光を勞う。若く「雷」はともに赴任先長興縣附近の溪谷の名。長興に赴く歸有光に對し、王世貞は、彼と同じく六十にして初めて召された平津侯公孫弘のように十年の後には高位に上るだろうという。二首目では、にもかかわらず當面は長興知縣という地方官しか得られなかつた彼に對して、赴任先での閑雅な生活をうたつて慰める。「孺子」は、度々辟せられるも官に就かなかつた漢の高士徐穉の字。ここでは母の喪に服するために山東按察司僉事の官を拜命せず長興に歸郷していた徐中行（字は子與）を指す。なお原注によれば、二首目は、長興縣に行けばむこうには歸有光と親しい徐中行がいるので、文雅な交際ができようと言っていることになる。徐中行は、王世貞や李攀龍とともに古文辭派後七子の一人に數えられる人物である。歸有光の文集には彼にあてた書簡もあり、古文辭派の徐中行と歸有光は親交があつたことになる。また、歸有光と同郷で特に親しかつた俞允文は、古文辭廣五子の一入である。彼は歸有光の長興赴任に際して次のような言葉を贈つてゐる。

古への人の其の後世に傳はる者、以て今の人の及ぶ可きに非らずと爲すは、皆過論なり。熙甫は經に明らかにして、古への道を行ひ、其の文を爲るは、司馬遷・劉向・揚雄・班固の徒を以て法と爲す。（俞仲尉先生集）卷十一「送歸熙甫赴長興序」

俞允文は、漢代の名文家という極めて古文辭的な規範でもつて歸有光を推賞する。もちろん俞允文がこのように述べる以上、歸有光自身がこのような文學觀を幾分なりとも有していたことが前提とならなければならぬ。

歸有光が『史記』を好んだことはよく知られている。『史記』は古

錢謙益の歸有光評價をめぐる諸問題

文辭派が最も信奉する書である。隆慶四年（一五七〇）、歸有光は、同年の進士で古文辭派の陳文燭のために「五嶽山人前集序」（震川先生文集）卷二を書いてゐる。歸有光は、その中で陳文燭の文は、『史記』の如きものだとして、自分は到底それに及ばない、と彼の古文を推賞する。この『五嶽山人前集』には、隆慶六年（一五七二）王世貞も序文を寄せており、司馬・左氏の法を得たものとして陳文燭を讃えている。ところが、錢謙益は『列朝詩集』陳文燭小傳で、文集『五嶽山人集』を「煩蕪剽擬にして王李の下流」であると攻撃するのである。

歸有光を呼ぶのに「唐宋派」という言葉を以てするのはいつに始まるのかわからぬが、歸有光の根本は、あくまで『史記』『左傳』にあるのであつて、唐宋古文を基本とするのではない。歸有光文學の特徴は、當時の極端な古典主義がもたらした模倣剽竊の文學に對し、唐宋古文を積極的に評價しようとした點にある。ところが、錢謙益が歸有光を發掘する過程で、歸有光が同時代の古文辭派から受けたであろう影響は切り捨てられ、専ら反古文辭的側面のみが強調されることになる。歸有光と王世貞が〈妄庸〉をめぐる論争した、という話を錢謙益が捏造したのは、まさに兩者の對立を鮮明にせんがためのことであつた。歸有光と古文辭派の關係については、より詳細な検討を必要としようが、少なくとも、古文辭を全面的に否定し、古文辭派と眞つ向から對立したという歸有光像は、修正されねばなるまい。

#### 四 王世貞「書歸熙甫文集後」

第二章において、すでに歸有光と王世貞の間には〈妄庸〉論争が無かつたことを論じたが、王世貞が「余豈に異趣せんや、久しくして始

めて傷む」といい、婁堅が兩者の間は「其の始め異同無くんばあらず」というように、歸有光と王世貞には當初何らかの行き違ひがあったらしい。しかしながら、兩者の異同とは、〈妄庸〉をめぐる論争ではあり得ない。

これについては、王世貞自身が語ったもの——「書歸熙甫文集後」(弇州山人讀書後)卷四)がある。これは『弇州山人四部稿』及び『續稿』に收められなかつたため、從來看過されていたようだが、極めて興味深い文なので、多少長くなるが敢て解説を加えることにする。

余、進士と成りし時、歸熙甫は則ち已に大いに公車の間の名有り。而るに數年を積みて第せず。試の罷む毎に、則ち主司相ひ與に咤恨す。歸生を以てして第せざれば、何ぞ名づけて公車と爲さんと。而して同年の朱檢討なる者は佻人なり。數々余に歸生の古文辭を得たるや否やを問ふ。余、有る無きを謝す。一日、忽ち一編を以て余が面に擲ちて曰はく、「是れ更に崔信明が水中の物に如かざるや」と。且つ謂ふ、「何ぞ歸生をして我に見えしめざる。當に李密が秦王を視し時の状を作すべし」と。余、戯れに答ふ、「子遂に能く秦王たらんか。即ち李密は未だ易からざるの才なり」と。退きて取りて之を讀むに、果して熙甫の文、凡そ二十餘章、多くは率略たる應酬の語なり。蓋し朱の見る所の者は、杜德機なるのみ。

王世貞が二十二歳の若さで進士に及第したのは、嘉靖二十六年(一五四七)のことである。その時すでに歸有光は、公車の間一すなわち會試に赴く舉人たちの世界では名の知られた人であったという。王世貞より十歳年長の歸有光は、嘉靖十九年(一五四〇)に南京の鄉試で第二に擧げられたものの、その後の會試で下第を繰り返していた。

このころ、王世貞の同年の進士で翰林院檢討の官にあつた朱某が、歸有光の評判を聞きつけ、度々歸有光の文を借りに來たが、王世貞は持つていないと答えていた。ある日、朱某が一冊の文編を王世貞の面前に投げ出して、「これは、見る所は聞く所に如かずといわれて水中に投げ込まれた唐の崔信明にも劣るしるものだ」と評し、「歸生が私に會えば、李密が秦王(唐の太宗)に會つた時のように私に感服するだらう」と壯語して歸つて行つた。王世貞がそれを見てみると、果して歸有光の文ではあるが、その多くは率略たる應酬の文であつた。朱某が見たのは、『莊子』應帝王篇にいう杜德機——本來の才能が發揮されず杜されたままのものであつた。

而して又た數年、熙甫の客にして中表の陸明謨、忽ち書を貽りて余を責數するに熙甫を推轂する能はざるを以てす。其の説の自る所を知らざるも、余、方に盛年情氣にして、漫爾として之に應じ、齒牙の鏗、頗る吳下の前輩に及び、中に謂ふ、陸浚明は差や人の意を強うす。熙甫は、小か浚明に勝れり。然れども亦た未だ語るに滿たずと。

それから數年して、歸有光の所の客で、王世貞のいとこにあたる陸明謨が、王世貞に手紙を寄越し、歸有光を推轂できぬとはどうしたわけだと責めた。當時血氣盛んで已に恃むところの多かつた王世貞は、陸明謨と應酬し、激するあまり、文評は吳の先輩にまで及んだ。陸燦(字は浚明)はまあまあである。歸有光はやや彼に勝るものの、語るほどの價值はないと。王世貞が陸明謨にあてた手紙については後述するが、それはほとんど歸有光に對する侮辱といつていいほどのものである。

又た數年して、熙甫始めて第し、又た數年して卒す。客に其の集



を梓して余に貽る者有り。卒卒として未だ展ぶるに及ばざるに、人の持ち去るところと爲る。旋ち曇端に徙處し、復た得て之を讀む。故り是れ近代の名手なり。……嗟乎、熙甫と朱生は皆作す可からず。恨むらくは、朱をして之に見えしめざるを。復た能く秦王の態を作すや否や。熙甫の集中、一篇有りて盛んに宋人を推し、而して我が輩を目して蜉蝣の撼と爲し、口を容さず。當に是れ陸生の報いられし所の書に于けるべく、故に言の酬せざるは無し。吾れ又た何をか憾みんや。吾れ又た何をか憾みんや。

その後、歸有光は及第し、しばらくして亡くなつてしまふ。死後、王世貞は歸有光の文集を貽られたが、それを見ぬうちに人に持つて行かれた。彼は、王錫爵の娘で觀音を奉じる曇陽子という名の女大師に歸依しており、萬曆八年（一五八〇）九月に曇陽子が物化した後は、一人精舎にこもつて三年ばかり修養していた。王世貞が歸有光の文集を手にし、その全容を知つたのはまさにこの時である。歸有光の死から約十年後のことになる。

そこで集中に、「項思堯文集序」を見つけた王世貞はいう。歸有光の集中に盛んに宋人を推賞して、我輩を蜉蝣（此蜉）の撼にたとえた手厳しい一文があるが、それはきつと陸明謨が私から受け取つた手紙に對するものであらう。故に歸有光としても應酬しないわけにはいかなかったのだ。今となつては何を憾もうぞと。

陸明謨については知るところが少ないが、歸有光には陸明謨の依頼で書かれた父の墓誌「陸子誠墓誌銘」（『震川先生集』卷二十一）があり、それによれば王世貞と陸明謨は縁續きだつたことがわかる。陸明謨が王世貞にあてた手紙の方は現存しないが、『弇州山人四部稿』卷百二十八には、その内容から陸明謨に對する返書と推察される「答陸汝陳」

三首が遺つてゐる。陸明謨から何故歸有光を推轂しないのだと詰問された王世貞は、その見當違ひを責めて、激昂のあまり、言葉は吳の先輩達の批評にまで及んでゐる。

震澤（王鏊）以前は、存して論ぜず。足下遠くは楊儀部（循吉）・祝京兆（允明）・徐迪功（頑卿）を見ざるか。近くは黃勉之（省曾）王履吉（龜）・袁永之（襄）・皇甫の伯仲（沖と濬）を見ざるか。亦た威な彬彬として聲有らずや。然れども或ひは曼衍にして綿力、或ひは迫詰にして艱思、或ひは清微にして促に類し、或ひは鋪綴して經無く、或ひは蹈襲して致辭、或ひは率意して情乏しく、或ひは閑麗にして弱に近し。見る所唯だ陸凌明の差や人を強うする有るのみ。陸の敘事は、頗る亦た典則なるも、往往にして未だ極まらずして盡く。當に是れ才短なるべし。歸生の筆力は、小か竟に之に勝るも、規格は旁離し、操縦は唯意もてし、單辭は甚だ工みなるも、邊幅足らず。其の文を得て之を讀む毎に、未だ竟らざるに輒ち解し、解に隨ひて輒ち竭く。至法を辭中に含み、餘勁を言外に吐かんと欲するが若きは、復た累車すと雖も、殆んど其の選に難し。僕、足下の歸文を稱するを恨みず。足下の李于鱗（攀龍）の文を見ざるを恨むのみ。于鱗、生平の胸中に唐以後の書の淳渟する無く、古始は往くとして造らざるは無く、敘致は宛轉たりて窮極苦心するに至る。

王世貞は、歸有光を陸凌明と比較すればやや勝るといふものの、歸有光の文は規格からはずれ、ひとりよがり、一つ一つの言葉は工みであるが、全體の潤飾に缺け、全部讀みおわらぬうちに内容がわかつてしまふ底の浅いものだとして評している。また、歸有光はこれから何度會試に赴いても及第は難しかろうと斷じており、その批評は非常に手嚴

しい。そしてその一方では、唐以後の書物を顧みない李攀龍の文を口を極めて賞讃する。このころの王世貞は、李攀龍に心酔していたのである。

右の「答陸汝陳」と「書歸熙甫文集後」によって事實關係を整理してみると、次のようになる。若いころ李攀龍の文學に心服していた王世貞は、陸明謨に對する返書の中で、歸有光の文をあげつらつた。そして歸有光の死後、その文集に「項思堯文集序」をみつけた彼は、これは昔、自分が陸明謨にあてた手紙の中で、吳の前人を譏り、歸有光の文を酷評したのが歸有光の知るところとなり、その結果として「項思堯文集序」が書かれたのだと判断する。歸有光を近代の名手だと認識するようになった王世貞は、歸有光の批判を憾みとはしていない。

このことは、「項思堯文集序」の批判を知った王世貞が、歸有光に〈妄庸〉の議論を挑んだとする『列朝詩集』小傳の記述とは一致しない。王世貞が陸明謨にあてた三篇の手紙にも〈妄〉や〈庸〉に關する議論はない。歸有光と王世貞の間には〈妄庸〉をめぐる論争が存在しなかつたことはもはや確實といえよう。王世貞晩年の「歸太僕贊」は、『列朝詩集』小傳がいうような〈妄庸〉論争に對する自悔ではない。嘗て陸明謨にあてた手紙の中で歸有光を酷評した、そのことを自悔したのである。

張傳元・余梅年の兩氏が編纂した『歸震川年譜』（商務印書館一九三六年）は、王世貞の「書歸熙甫文集後」を附録として收めるが、そこでは最後の「熙甫の集中、一篇有りて盛んに宋人を推し、我輩を目して蜉蝣の撼と爲し……」以下を削去している。この部分が『列朝詩集』小傳の記述と一致しなかつたため削つたものと思われるが、これは錢謙益の作りあげた歸有光像を拂拭できなかつた好例である。『列

朝詩集』小傳を鵜呑みにすることがいかに危険であるかが知られよう。

## 五 『列朝詩集』湯顯祖小傳

錢謙益が歸有光の傳記について潤色を行なつたことは上述したとおりであるが、實はこのような傳記の潤色は、湯顯祖の傳記についても見られる。『列朝詩集』湯顯祖小傳は、湯顯祖が王世貞ら古文辭派と相い容れず、彼らの文を標塗した話を載せている。

又た、獻吉・千鱗・元美の文賦を簡括し、其の中の用事の出處、及び漢史唐詩を増減せし字面を標し、白下（南京）に流傳し、元美をして之を知らしむ。元美曰はく、「湯生吾が文を標塗す。異時亦た當に湯生を標塗する者有るべし」と。王李の興りし自り、百有餘歲、（湯）義仍當に霧零充塞の時に當りて、其の間に穿穴し、力めて解駁を爲す。歸太僕の後、一人のみ。

湯顯祖が王世貞らの文を標塗したという話は、元來、湯顯祖が王世貞の長子王士驥（字は濟生）にあてた手紙に見えるものである。

弟、少年たりしとき識無し。嘗て友人と文を論じ、以爲らく、漢・宋の文章、各々其の趣を極めし者は、易くして學ぶ可きに非らざるなり。宋文を學びて成らざるは、驚に類するを失せざるも、漢文を學びて成らざるは、止だ虎と成らざるのみならずと。因りて倣郷の帥膳郎の舎に於いて李獻吉を論じ、歷城の趙儀郎の舎に於いて李于鱗を論じ、金壇の鄧孺孝の館中に於いて元美を論じ、各々其の文賦中の用事の出處、及び漢史唐詩を増減せし字面の處を標し、此れを見て道ふ、神情聲色は、已に昔人に盡くされ、今人更に雄とす可き無しと。妙なる者は能と稱すのみ。然れ

ども此れ其の大致にして、未だ深く文心の一二を論ずる能はず。而るに已に司寇公の座に傳ふる者有り。公、微笑して曰はく、「之に隨はん。湯生吾が文を標塗す。他日湯生の文を塗する者有らん」と。弟、之を聞き、憮然として曰はく、「王公は達人なり。吾れ之を愧づ」と。

湯顯祖の右の文によると、彼が王世貞の文についてあれこれ論じたことは、不本意な形で王世貞の耳に入つたらしい。また、それを聞いた王世貞は、微笑しながら、それを軽くたしなめる調子で「どうぞ好きに。湯生は私の文を標塗したが、將來湯生の文も標塗されるだらう」といい、鷹揚な態度をとっている。ゆえに湯顯祖も「王公は達人だ。私は愧づかしく思う」といわざるを得なかつたのである。湯顯祖にしてみれば、自分の意を盡していい文評が、思わぬ反響を呼び、忸怩たる思いだったのである。

ところが『列朝詩集』小傳では、このやりとりは 古文辭派の王世貞と反古文辭の湯顯祖との相剋を示すエピソードとして取りあげられている。湯顯祖小傳は、湯顯祖の釋明の言葉を削去したばかりでなく、王世貞の言葉を「湯生吾が文を標塗す。異時亦た當に湯生を標塗する者有るべし」と憤怒の調子に書き換え、その傲慢さを強調するのである。

『列朝詩集』湯顯祖小傳が取りあげたエピソードは、事實無根とまではいえぬ。しかし、その取り扱いについては、錢謙益の作爲が感じられてならない。

このことは、錢謙益が湯顯祖の文學を評價するのに、「歸太僕の後、一人のみ」という言葉を以てするのに關係があらう。錢謙益は、「湯義仍先生文集序」(『初學集』卷三十一)で、王世貞の『四部稿』を「棟

錢謙益の歸有光評價をめぐる諸問題

宇に充ち牛馬に汗するも、即きて之を跡るに、枵然として有る所無し」と攻撃する一方、『列朝詩集』に於いて、時代の異なる歸有光と湯顯祖を同じ丁集第十二卷に収めている。錢謙益にとって反古文辭の正統は、歸有光―湯顯祖―自分なのであって、そのためには、先覺者としての歸有光や湯顯祖が、眞つ向から古文辭派と對立する存在であることが望ましい。『列朝詩集』の歸有光小傳や湯顯祖小傳に於ける潤色は、そのために爲されたものであらう。

## 六 歸有光墓誌銘の改竄

錢謙益によって粉飾が施された歸有光像は、明末清初、文壇が反古文辭へと轉換し、歸有光に對する評價が高まる中、絶對的なものとなつてゆく。

錢謙益が歸昌世とともに編纂した『歸太僕文集』は今日に傳わらないが、康熙年間、歸昌世の子歸莊は、これをもとに校定を加え、『震川先生集』四十卷(以下康熙本と稱す)を上梓した。つまり、四庫全書や四部叢刊に入つて現在廣く行なわれている康熙本は、元來錢謙益の手になるものである。

この康熙本に附載されている歸有光の墓誌銘には、重要な改竄の跡がみられる。上段が墓誌銘の撰者である王錫爵の文集の中にみえるもの、下段が康熙本附載のものである。

王錫爵『王文肅公文集』卷八

歸有光墓誌銘

康熙本附載

歸有光墓誌銘

○萬曆乙亥、熙甫先生葬于崑山東南門之內。其仲子寧、求余志

○萬曆乙亥、熙甫先生葬於崑山東南門之內。其子子駿、求予志其

其墓……

○熙甫眉目秀朗、明悟絶人。九歲能成文章、無童子之好。弱冠盡通六經三史七大家之文、及濂洛關閩之說。邑有吳純甫先生、才聞高識、見熙甫所爲制義、大驚、以爲當世士無及此者。由是名動四方……

墓……  
○熙甫眉目秀朗、明悟絶人。九歲能成文章、無童子之好。弱冠盡通六經三史大家之文、及濂洛關閩之說。邑有吳純甫先生、見熙甫所爲文、大驚、以爲當世士無及此者。繇是名動四方……

まず、墓誌銘の依頼者は、本來仲子子寧であるにもかかわらず、康熙本では、歸昌世の父にあたる子駿に書き換えられている。

次に吳純甫先生が歸有光の「制義」すなわち八股文を賞讃し、四方に名が轟いたという話であるが、康熙本は「制義」を「文」と改めている。そのため、康熙本附載の墓誌銘だけによると、まるで吳純甫先生が賞讃したのは古文であり、歸有光は若い頃から古文作家として評價されていたかの如き錯覺にとられ、歸有光の基本的な傳記研究に大きな誤りを犯すことになるのである。

このような墓誌銘の改竄がいつの時點で行なわれたかについては、錢謙益と歸昌世が編纂した『歸太僕文集』が傳わらないため、特定することはできない。しかしながら、「制義」を「文」に改めるといった墓誌銘の改竄が、錢謙益を中心とする明末清初の歸有光再評價の氣運の中で行なわれたものであることはまちがひなからう。

また、歸有光に「五嶽山人前集序」を贈られた陳文燭は、歸有光の死後、爲に文集の序文と墓表を書き、それは萬曆十六年に重修された崑山本に附されている。しかし、康熙本は錢謙益の序文を載せながら陳文燭の序文を載せないし、王錫爵の改竄された墓誌銘を収めながら

陳文燭の墓表を収めていない。康熙本が墓誌銘を載せて墓表を缺いているのは、文集編纂の體裁上、奇異なことといわねばなるまい。これはおそらく、陳文燭が錢謙益によって「王李の下流」であると決めつけられたことと無關係ではなからう。康熙本が種々の問題を抱えた版本であることは、再認識されるべきである。

## 結 語

明文學史の中で半ば忘れられていた歸有光を、發掘再評價した錢謙益の功は、認められるべきである。しかし、以上検討してきたように、歸有光の傳記資料については、その過程でかなり手が加えられている。『列朝詩集』歸有光小傳は基本的な傳記資料であり、康熙本『震川先生集』も最もよく行なわれている版本だけに、その粉飾と墓誌銘の改竄が後世に與えた影響は大きい。今日我々が文學史の上で認識している歸有光像は、錢謙益が作りあげた歸有光にすぎず、ありのままの歸有光との間には、ずれが生じている。このずれが確認されない限り、歸有光文學の研究は、錢謙益の歸有光像を踏襲するという愚を繰り返すことになる。

註(一) 歸有光の傳記と文學に關する主な研究としては、橋本循氏の「歸震川」(『中國文學思想管見』所收、朋友書店、一九八二)、呂新昌氏の「歸震川評傳」(『人文庫』一九七九)などがある。

(二) 吉川幸次郎氏の「錢謙益と清朝『經學』」(『吉川幸次郎全集』卷十六所收、筑摩書房、一九七〇)および「文學批評家としての錢謙益」(『同』卷二十六所收、一九八六)、佐藤一郎氏の「歸有光の系譜」(『中國文章論』所收、研文出版、一九八八)

(3) 『列朝詩集』については、錢謙益の人品の問題とも相俟つて、古來評價の分かれるところである。清代では王士禛が口を極めてこれを罵り、『四庫提要』は、朱彝尊の『明詩綜』を公平な選評であるとして『列朝詩集』を批判する。また一方で葉德輝などは、『明詩綜』を郷愿の書として斥け、『列朝詩集』を選家の詩史として高く評價する。評價の歴史については、莫伯驥『五十萬卷樓羣書跋文』(一九四八)に詳しい。

(4) 『列朝詩集』歸有光小傳 有光、字熙甫、崑山人。九歲能屬文、弱冠盡通六經三史六大家之書、浸漬演進、蔚爲大儒。……熙甫爲文、原本六經、而好太史公書、能得其風神脈理。其於六大家、自謂可肩隨歐曾、臨川則不難抗行。其於詩、似無意求工、滔滔自運、要非流俗可及也。

(5) 『歸太僕集』(崑山本)の卷三十二に九十一首、四部叢刊『震川先生集』(康熙本)のみに見える三十六首、それに『列朝詩集』が収める逸詩二首を加えた數。ただし、『列朝詩集』に倣い、連作は一首として數えた。

(6) 『列朝詩集』歸有光小傳 當是時、王弇州踵二李之後、主盟文壇、聲華烜赫、奔走四海。熙甫一老學子、獨抱遺經于荒江虛市之間、樹牙頰相摻拄不少下。嘗爲人文序、詆排俗學、以爲苟得一二妄庸人爲之巨子。弇州聞之曰、妄誠有之、庸則未敢聞命。熙甫曰、唯妄故庸、未有妄而不庸者也。弇州晚歲贊熙甫畫像曰、千載有公、繼韓歐陽、余豈異趣、久而自傷。識者謂先生之文、至是始論定、而弇州之遲暮自悔、爲不可及也。『列朝詩集』に先立って、崇禎十六年(一六四三)に『歸太僕文集』(佚)を編纂した錢謙益は、『題歸太僕文集』(「初學集」卷八十三)を作り、そこにこれと同じエピソードを引いている。ただし、歸有光の言葉は「唯庸故妄、未有妄而不庸者也」に作る。

(7) 四部叢刊本『震川先生集』卷二「項思堯文集序」蓋今世之所謂文者難言矣。未始爲古人之學、而苟得一二妄庸人爲之巨子、爭附和之、以詆排前人。韓文公云、李杜文章在、光燄萬丈長、不知羣兒愚、那用故誇

錢謙益の歸有光評價をめぐる諸問題

傷、蚍蜉撼大樹、可笑不自量。文章至于宋元諸名家、其力足以追數千載之上、而與之頡頏。而世直以蚍蜉撼之、可悲也。無乃一二妄庸人爲之巨子以倡道之歟。

(8) 鷺野正明氏は、『歸有光の「文」理論—軌道と抒情の融合—(筑波中國文化論叢) 2 一九八三・三)で、「項思堯文集序」中の「文の永久存立」の思想について指摘された。ただし氏は、制作年を進士及第の嘉靖四十四年三月(九月)とし、歸有光は、同年刊行の王世貞『藝苑卮言』卷三に「唐之文庸、猶未離浮也、宋之文陋、離浮矣、愈下矣、元無文」とあるのを逆手にとつて王世貞を批判したのだとされる。しかし、後述するように歸有光はこの年王世貞から詩を贈られており、制作年を嘉靖四十四年とするのは不自然である。「項思堯文集序」制作の直接の契機となつた王世貞の「答陸汝陳」は、歸有光の進士及第以前のものである。制作年は嘉靖四十四年以前とするのが妥當であらう。

(9) 『明史稿』歸有光傳、『明史』文苑傳 有光爲古文、原本經術、好太史公書、得其神理。時王世貞主盟文壇。有光力相砥排、目爲妄庸巨子。世貞大憾、其後亦心折有光、爲之讚曰、千載有公、繼韓歐陽、余豈異趣、久而自傷。其推重如此。

(10) 『明史稿』歸有光傳 錢謙益遂即其言、以詆世貞。然操觚家、從此鮮實學、而妄談歐曾、亦不能無弊云。

(11) 『明史稿』の實質的な撰者は萬斯同であるが、彼の師の黃宗羲は、錢謙益とは異なる獨自の歸有光觀をもつていたと思われる。拙稿「黃宗羲の歸有光評價をめぐる」(「學林」十七號、一九九一・十二)を参照されたい。

(12) 汪琬『鈍翁續稿』卷五十一「擬明史列傳」歸有光傳 有光之學、原本六經。而好司馬遷書、得其風神脈理。故爲文超然俊逸、可配古大家云。是時太倉王世貞、方以辭章名、傾動海內。有光獨歎曰、今之文難言矣。未嘗知古人之學、苟得一二妄庸人爲之巨子、爭附和之、用以詆排前賢。

意蓋指世貞也。其後世貞聞之、亦魂服焉。

- (13) 註(6)のごとくこのエピソードは、崇禎十六年(一六四三)の「題歸太僕文集」にはじめて登場する。

- (14) 『有學集』卷十六「新刻震川先生文集序」余少壯汨沒俗學。中年從嘉定三宿儒遊、郵傳先生之講論、幡然易轍、稍知向方。先生實導其前路。啓禎之交、海內望祀先生、如五緯在天、芒寒色正。其端亦自余發之。この部分、劉禹錫の「柳柳州集序」をふまえている。

- (15) 婁堅『學古緒言』卷二「歸太僕應試論策集序」崑山歸熙甫先生、少而選於經術、於注疏、無所不讀。厭薄時之文、力追大雅。尤好左氏太史公書、平生丹鉛其傍、提要鉤玄、不啻數本。雖繁簡少異、要於先求指歸、次及菁蕩。而唐宋六氏之作、則皆所沈浸而取裁也。……又言吾爲舉子業、信筆縱橫、而世多以爲奇。至爲古文辭、必謹於程度、不敢少自弛。顧其深知我者、舉世僅數公而已。先生嘗爲人序其文、中有妄庸之譏。或曰、妄誠有之、未必庸也。先生曰、子未之思耳。唯庸故妄、唯妄益庸。聞者莫不心厭焉。當是時、吳之以高文稱者、曰王司寇元美。其始不無異同。及歸自留都、從其家求畫像、摹爲小幅、系以傳贊、屬予書之。蓋曰、千載有公、繼韓歐陽、予豈異趨、久而始傷。而司寇季子、時爲子言、公之歸也、嘗讀蘇應詔諸篇、願語之曰、此乃可謂策耳。吾晉楚錄文、豈能及哉。予以是歎服。司寇晚年、誠益高而心益下、蓋如此。而世之君子、或未必知之也。

- (16) 何景明『何大復先生集』卷三十一「與李空同論詩書」
- (17) 地縁については、佐藤一郎氏の『中國文章論』第二章第三節の「同郷人歸有光と王世貞」に指摘がある。

- (18) 王世貞『弇州山人續稿』卷百十五「太中大夫河東都轉運鹽使司運使少葵公暨元配歸安人合葬誌銘」、および『同』卷百二十八「登仕郎鴻臚寺序班百泉歸君暨配郁孺人墓表」参照。兩者の姻族關係については、管見の及ぶところ、許建崑氏の『李攀龍文學研究』(文史哲出版社、一九八

七)第七章「結語」に指摘があるのみである。

- (19) 『弇州山人四部稿』卷三十八「送歸熙甫之長興令」および王世懋『王奉常集』卷七「送歸熙甫尹長興」

- (20) 『琴操』卷下「信立退怨歌」にみえる。ただし下和は陵陽侯に封せられたがそれを辭したという。

- (21) 『弇州山人續稿』卷百三十四「中奉大夫江西布政使司左布政使天目徐公墓碑」および李攀龍『滄溟先生集』卷二十三「明故封太安人許氏墓誌銘」による。

- (22) 俞允文『俞仲尉先生集』卷十「送歸熙甫赴長興序」古之人、其傳於後世者、以爲非今之人所可及、皆過論也。熙甫明經、行古之道、其爲文、以司馬遷劉向揚雄班固之徒爲法。

- (23) 陳文燭『西園文集』は、隆慶六年の王世貞「五嶽山人前集序」と隆慶四年の歸有光の序文を冠している。

- (24) 「書歸熙甫文集後」は、『弇州山人續稿』の目録では卷百五十七に見えるが、同集中には收められていない。

- (25) 『弇州山人讀書後』卷四「書歸熙甫文集後」余成進士時、歸熙甫則已大有公車問名。而積數年不第。每罷試、則主司相與咤恨、以歸生不第、何名爲公車。而同年朱檢討者、佻人也。數問余得歸生古文辭否。余謝無有。一日、忽以一編擲余面曰、是更不如崔信明水中物邪。且謂何不令歸生見我、當作李密視秦王時狀。余戲答子遂能秦王邪、即李密未易才也。退取讀之、果熙甫文、凡二十餘章、多率略應酬語。蓋朱所見者、杜德機耳。

- (26) 『舊唐書』文苑 鄭世翼傳、『新唐書』文藝 崔信明傳にみえる。

- (27) 『新唐書』太宗紀に「(李)密見太宗、不敢仰視、退而歎曰、眞英主也」とある。

- (28)(29) 「書歸熙甫文集後」而又數年、熙甫之客中表陸明諱、忽貽書責數余以不能推歸熙甫。不知其說所自、余方盛年嬌氣、漫爾應之、齒牙之

錫、頰及吳下前輩、中謂陸澄明差強人意、熙甫小勝澄明、然亦未滿語。又數年、而熙甫始第、又數年而卒。客有梓其集貽余者、卒卒未及展、爲人持去。旋徙處蠡塘、復得而讀之。故是近代名手。……嗟乎、熙甫與朱生、皆不可作矣。恨不使朱見之、復能作秦王態否。熙甫集中有一篇盛推宋人、而自我輩爲蟬聯之憾、不容口。當是于陸生所見報書、故無言不副。吾又何憾哉。吾又何憾哉。

(30) 『弇州山人續稿』卷六十六「蠡塘大師紀」、卷七十八「蠡陽大師傳」參照。

(31) 「蠡塘」は、精舍の名であらうか。待考。『弇州山人續稿』卷二十一の送別詩の前書きには、「余自庚辰來、抱影蠡塘、不識城西水面者、三載餘矣」とある。

(32) 『弇州山人四部稿』卷百二十八「答陸汝陳 其一」 震澤以前、存而弗論。足下遠不見楊儀部祝京兆徐迪功、近不見黃勉之王履吉袁永之皇甫伯仲耶。不亦成彬彬有聲哉。然或曼衍而綿力、或迫詰而艱思、或清微而類促、或鋪綴而無經、或蹈襲而鮮致、或率意而乏情、或困麗而近弱。所見唯有陸澄明差強人耳。陸之敘事、頰亦典則、往往未極而盡。當是才短。歸生筆力、小竟勝之、而規格旁離、操縱唯意、單辭甚工、邊幅不足。每得其文讀之、未竟輒解、隨解輒竭。若欲含至法於辭中、吐餘勁于言外、雖復累車、殆難其選。僕不恨足下稱歸文、恨足下不見李于鱗文耳。于鱗生平胸中無唐以後書滄滴、古始無往不造、至於絃致宛轉、窮極苦心。

(33) 朱彝尊の『靜志居詩話』卷十三「歸有光」は、妄庸云々といった話には全く觸れずに、王世貞の自悔を説明している。『弇州早年評震川文、謂如秋潦在地、有時汪洋、不則一瀉而已。晚歲、乃作贊云、千載有公、繼韓歐陽。予豈異趨、久而自傷。蓋悔之深矣』弇州早年の評とは、『藝苑卮言』卷五「文評」を指す。ただし朱彝尊が贊文の本来「始」であるべき字を「自」に作るのは、『列朝詩集』小傳あるいは『明史』をそのまま引用したためと考えられる。

錢謙益の歸有光評價をめぐる諸問題

(34) 『列朝詩集』湯顯祖小傳 又簡括獻吉于鱗元美文賦、標其中用事出處及增減漢唐詩字面、流傳白下、使元美知之。元美曰、湯生標塗吾文、異時亦當有標塗湯生者。自王李之興、百有餘歲、義仍當務乎充塞之時、穿穴其間、力爲解救。歸太僕之後、一人而已。

(35) 湯顯祖『玉茗堂尺牘』卷一「答王澹生」 弟少年無識。嘗與友人論文、以爲漢宋文章、各極其趣者、非可易而學也。學宋文不成、不失類鶩、學漢文不成、不止不成虎也。因於儼鄉帥臚郎舍論李獻吉、於歷城趙儼郎舍論李于鱗、於金壇邵孺孝館中論元美、各標其文賦中用事出處、及增減漢唐詩字面處、見此道神情聲色、已盡於昔人、今人更無可雄。妙者稱能而已。然此其大致、未能深論文心之一二。而已有傳於司寇公之座者。公微笑曰、隨之。湯生標塗吾文、他日有塗湯生文者。弟聞之、憮然曰、王公達人、吾愧之矣。

(36) 歸有光文集の版本および康熙本『震川先生集』の成立については、拙稿「歸莊と『震川文集』」(『學林』十四・五號 白川靜博士拿壽記念論集一九九〇・七)を参照されたい。

(37) 墓誌銘の實際の撰者は唐時升である。『三易集』卷十七に「太僕寺丞歸公墓誌銘代」とみえる。『王文肅公文集』中のもとの比べると、重要な語句の異同はない。